

---

# 最速を求めて

うしおなとら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最速を求めて

### 【Nコード】

N0889N

### 【作者名】

うしおなとら

### 【あらすじ】

最速を求める男の子のお話。  
要望があれば続きを書くかも？

(前書き)

でもたぶん続きはきついかも

小さい頃、俺は変な子供だった。

みんなが嫌がってた近くにある滑空場。

『近所迷惑』だの、『口約違反』だのいろいろみんな言っていた。  
でも俺はそんな場所が大好きだった。

目の前で走り去り、上空へと舞い上がる鋭い鋼鉄の鳥たち。

切り裂くような風切り音と叩きつけるようなエンジン音は俺の胸を  
奮わせた。

物心つく前から見続けて来たその光景。

フェンスの向こう側、飛び立っていく飛行機が俺はたまらなく好き  
だった。

両の足で地面を踏みしめた頃、俺にとっての遊びは只走ることだっ  
た。

何が楽しかったのかはわからんが、朝から晩まで飽きることなく走  
り続けてきた。

そして、自分より速いものが何となくにだが許せなかった。

だから俺はいつも追いかけていた。

走っている高校生の集団を、鼻歌交じりの自転車を、排ガスを吹き  
まく自動車を、ガタガタ鳴らす電車を。

追いつける訳もない、そんなこと俺の中の何かがわかってる。  
けれど俺は只嫌だったんだ。

だから只管に、我武者羅に、俺は走ってたんだ。

小学生のころはそんな俺はかけっこでいつも一番だった。  
置き去り、抜き去り、そんな瞬間はたまらなく好きだった。

でも中学に入ったころ、俺は井の中の蛙だと思い知らされた。  
俺なんか唇を噛み締めて走っているのに、悠々と俺を置き去りに  
する女。

別に女性差別主義なわけではない。

男には俺を抜ける人間がいなくて、只たまたま女に俺を抜ける人間  
がいた。

そしてそれがたまらなく嫌だった、それだけの話。

俺はせいぜい県大会レベル。

けれどそいつは全国でも屈指の実力者だった。

日本で稀にみる逸材で、オリンピックでメダルさえ狙える潜在能力  
があると世間は囁し立てていた。

みんなは言った、『天才少女』だと。

けれどそれがまた俺は嫌だった。

俺はそいつに置き去りにされたくなくって、いつか追いぬいてやる  
うと思つて、只管に走った。

けど俺と同じくらい、そいつは走っていた。

「あなたに抜かれたくないだけよ」

そいつはいつも変わらずそう言っていた。

天才は俺みたいな秀才と同じくバカみたいな努力家だった。

そのスカした笑顔が癪に障り、時折聞こえる吐息が煩わしく、降り乱す汗が気色悪かった。

そしてそんなそいつが俺はたまらなく好きだった。

整った顔立ち。

明るく笑顔でも振り撒けば同じクラスの、学年一の美少女と同じくらいに、モテるであろう。

が、そいつは奈何せん仏頂面過ぎた。

無表情の仮面を張り付け、口数も少なく、淡々と喋る。

人形のような、そう形容するのが正しいのだろう。

それでも俺は只の男の子。

部活ではたまに笑顔を見せるのに、教室では無表情だ。

「なんでそんななんだ？」

「別にいいじゃない、あなたには笑顔を振りまいてるでしょう？」

からかう様に、けれどやわからかに。

クツクツと笑うそいつが俺はたまらなく好きだった。

中学を卒業し、中学女子最速の称号を手に入れたそいつとは違い、

俺はせいぜい県大会。

三年のときたまたま全国大会に出れた、その程度だ。

俺はそいつと同じくとある高校に陸上選手として引き抜かれた。

高校生になっても俺は変わらなかった。

ただ只管速く、速くなりたかった。

馬鹿みたいに走って、走って、走って、走って、走って。けれどやっぱり県屈指の実力者が寄り集まったそこでは、俺は只の凡夫だった。

そいつは高校生になっても変わらなかった。

並みいる人間を抜き去り、そいつはいつでも最速だった。

妬み、嫉む先輩どもを実力と努力量で押し伏せ、黙らせ、そいつは走った。

かつこよくて、綺麗で、その精神に只管俺は感服した。

相も変わらず無表情なそいつだったが、相も変わらず俺には笑いかけてくれた。

たまの休み、そうはいつでも俺は走って、飛行機を見て、電車を見て、そんな休み。

そいつはそんな俺の休日にならず付き合っていた。

俺の家とそいつの家は真正面に向かい合うように立っていた。小さい頃から俺について走り回るのがそいつの日常でもあった。

両親が離婚し、妹を死なせた経験を持つそいつが家にご飯を食べに来て、母親によく『化粧でもしたら』と言われていた。

けど俺はそいつを一番輝かせる化粧は汗、そう信じて疑わなかった。昔はでかい家に住んでいて、舞踊習ってたんだから変わったもんだ。

インターハイ、そして国体。

そいつはありえないほどの実力で、まだ一年坊主だというのに、表彰台の一番上へのし上がった。

表彰状片手にニヤリと口元を釣り上げるそいつ。

うれしさと悔しさ、そしてなぜか誇らしさが俺の胸を満たしていた。

冬休みまであと少し、そんな時期に俺は顧問から呼び出された。

「長距離に転向してみんか？」

俺にかけたのはそんな言葉だった。

嫌だった。

だが泥の中にうずもれているような今の現状。  
思い浮かんだ栄光の下に立つそいつ。

そちらのほうで俺は嫌だった。

「大会に一度だけ出るんだったら」

俺は顧問にそう言い放った。

全国的にも有名なマラソン大会。  
出場資格は特になく、けれど現役のマラソン選手も出場するその大会。

そこで俺は遥か後方に並みいる人間を置き去りにし、ゴールテープを切り裂いた。

根性論からくるふざけた練習量、血反吐を吐き、血尿を出し、走り続けた。

それは俺に驚異的なスタミナを授けた。



『マラソン界の新星』などと大々的にマスメディアに取り上げられた。

たった一週間で、無名だった俺の名は全国に轟いた。

うれしかった、久々のゴールテープを切る感覚は酷く官能的だった。けれどそれ以上に、俺は俺が嫌だった。

俺は一番に駆け抜けた、けれどこれは俺が成りたかった一番じゃないのだ。

速いけど速くない。

俺はこの矛盾がたまらなく嫌いだった。

そして鬱憤を晴らせぬまま年が明け、俺はいつものように走っていた。

そこには変わらずそいつがいた。

ひと通り走り終え、留守となった家の中。

俺はそいつと向かい合っていた。

「おめでとうって……言っただ方がいいのかしら？」

「うれしかねえさ」

「そう？個人的には酷くうれしいんだけど」

「……なんでだ」

「キミのことが好きだからだよ」

唐突な、それは告白だった。

「あなたは私の憧れだった。

あなたに追い付きたくて、私はひたすら走った……置いてかれた  
くなんてなったから。

ずっと、私はこう言ってしまいたかった。

でもいつ言えいいのか、私にはわからなかったの」

真摯な瞳は俺を貫く。

不覚にも、いや必然のように俺の胸は高鳴った。  
けど……。

「あなたは意外にプライドが高いわ。

追い付きたくって始めた陸上でこんな風になっちゃったら受け入  
れてくれないような気がして。

でも、あなたは今や全国最高の長距離選手……！

……今なら受け入れてくれるかもって思ってたね」

その言葉が、そいつの言葉が。

幼馴染の、ほとんど家族の、惚れた女の、その言葉が俺には許せな  
かった。

無意識のうちに俺の拳は振り上げられ、そいつの頬を打っていた。

転がされる小さな体。

生まれて始めて俺はそいつに手を挙げ、酷い意味で泣かせた。  
涙眼のそいつに馬乗りになり、俺は触れ合うほどに顔を近づける。

「……お前は、俺に……俺の……なんにもわかつちやいねえ！」

無理やりに唇を合わせ、舌をねじ込む。

小ぶりなふくらみを覆う服を乱暴に取り上げ、声を上げようとする  
そいつの口に再び唇を合わせる。

全裸に剥いて、焼けない粉雪の肌を蹂躪し、俺は自分の欲望を叩き  
つけた。

気が付いたとき、そいつは嗚咽を漏らし、俺の欲望に染まっていた。

その場所に、そいつに俺は耐え切れず、わけもわからず叫んで俺は  
逃げ出した。

数か月ほどの時間がたっていた。

俺は只管喧嘩に明け暮れていた。

鍛え上げた脚での一撃は、並みいる不良どもを薙ぎ倒した。

俺はバイクに乗っていた。

風を切る、そんな感覚がたまらなく好きだった。

子供のころ憧れた、風のような存在になれた気が俺はしていた。

俺は好んでチキンランを繰り返した。

時には崖で、時には堤防で、時にはダムで。  
命をチップにかけた、狂った遊びが大好きだった。

そしてそこで手に入れた女の家に入り浸る、勝った男の家に入り浸る。

腐った生活を俺は続けていた。

何時だったか、俺はテレビをぼんやりと眺めていた。  
隣に居る裸の女を無感動な目で見つめながら。

俺はこれでもそれなりの顔立ちをしている。

ただ目つきは鋭く三白眼で、瞳孔は獣のように縦に裂け、オールバックで纏めている。

加えてあまり丁寧な言葉遣いが出来ない。

故にモテるということはありませんだったのだが、やはりそんな俺をカッコイイという女もいるらしい。

映し出されていたニュース。

それはそいつが陸上を引退するということだ。

『陸上界の至宝』とまで謳われたそいつ。

それがまだ高校二年生だというのにやめるというのだ。

茶道部を立ち上げたそうだ、意味がわからんな。

俺は一年ほど、まったくと言っていいほど動かなかった。

けれどいつの間にか、遮二無二に駆けだした。

相も変わらず俺は走り抜けて行った。

そして俺の家の前、そいつの家の前、そこにそいつはいた。

「ごめんなさい、私がこれは一方的に悪かったわ。

だから……ここじゃない遠くで、一緒に最速を目指しましょ」

近づくそいつの手に収まっているのは鈍く光るナイフ。

さっくりと、俺の胸に刺さるのを俺はどこかで喜んでいた。

噴水のように飛び散る鮮血は、俺とそいつを濡らしていく。

今まで見た中で最も輝いた笑顔を残し、俺とそいつの意識は闇に沈んだ。

気が付いたとき、俺の周りには大人たちがいた。

「生まれたか！大安泰だ！！」

喜ぶ男は……俺の父親か？

……ははっ、生まれ変わるとはな。

『あら、また会ったわね』

「口をきいた！あやかし！？……いや、風……か……？」

首を声の方に向けてみればクールに笑うそいつの姿。

『ここなら邪魔もないわ……ね？一緒に行きましょ、速さの果てに』

友達を捨てて、こいつは付いてきてくれたのか？

天真爛漫なやつと男勝りなやつ、気の強そうなやつが居たっけ？

一人だけいた友達の話だったら茶道部の部長になってたんだよな？  
後輩にも慕われて、イイ奴だったはずだよな。

こいつは変わった、だったら俺も変わるのだろうか？

『変わらなくていいわ、あなたはあなたのままで。』

それが私が憧れたあなたなんだから』

そっか……じゃあ行くか？

『ええ、初めての責任は取ってもらわないと。』

私、蛇みたいにしつこいわよ？』

任せとけ、なあ晶。

『期待してるわよ、隼人』

俺こと隼人、もとい服部隼人と高野晶は矢神より、ここ伊賀の里に降り立った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0889n/>

---

最速を求めて

2010年10月10日23時54分発行